

2007 年 8 月 31 日

2007 年本田賞

世界初の実用的な腹腔鏡下胆嚢摘出手術を行い

現代の内視鏡外科手術の急速な普及と技術革新への端緒を開いた

フランスの開業医 フィリップ・ムレ博士へ

—本田財団が授与—

(財) 本田財団（設立者：本田宗一郎・弁二郎兄弟、理事長：川島廣守）は、2007 年の本田賞をフランスのフィリップ・ムレ博士（Philippe Mouret, M.D., General Surgery）に授与することを決定した。ムレ博士は 28 人目の本田賞受賞者となる。

かつて腹部や胸腔内の腫瘍などの摘出手術は、開腹によるものが当然とされていたが、リヨンで開業していた外科医のムレ博士は、1987 年に CCD カメラを用いた世界初の実用的な手技による腹腔鏡下胆嚢摘出術を行い、現代の内視鏡外科手術の急速な普及と技術革新への端緒を開いた。

腹腔鏡下の胆嚢摘出手術自体はミューヘ博士（Dr. Eric Mühe）の先例もあったが、ムレ博士は婦人科におけるセム博士（Dr. Kurt Semm）の技法に独自の工夫を加え、より困難な外科手術に応用した。この成功はデュボワ博士（Dr. François Dubois）、ペリサ博士（Dr. Jacques Périssat）らと共に広められ、今日の外科手術の概念を全く変えることとなった。

独自の医療哲学を持つムレ博士は、この手術方法をあくまで患者の体への負担をできるだけ軽減させること（低侵襲性）を追及するために開発した。これにより切開を最小限に止めることで、痛みや消耗が少なく回復に要する日数も大幅に短縮される。加えて入院に要する費用や医療リソースの削減、患者の社会復帰の早さなど、社会経済的メリットも得られるため、欧米に次いで日本を始め全世界で急速に普及が進んだ。また、その後のエレクトロニクスと手術技法の進化により、胃がんや肺がんなど応用範囲が大きく広がり、さらには術者の微妙な操作を助ける最先端ロボット手術の発展にもつながった。

ムレ博士の「医師の“痛み”が患者の痛みを和らげる」という哲学に基づく偉大な功績は、人や社会との調和を第一に考えるエコテクノロジー*の最良の実例の 1 つであり、本田賞にふさわしいものである。

第 28 回本田賞授与式は、2007 年 11 月 19 日に東京の帝国ホテルで開催され、副賞として 1,000 万円が贈呈される。

※ エコテクノロジー（Ecotechnology）

文明全体をも含む自然界をイメージした Ecology（生態学）と Technology（科学技術）を組み合わせた造語。人と技術の共存を意味し、人類社会に求められる新たな技術概念として 1979 年に本田財団が提唱。

問い合わせ先：(財) 本田財団 〒104-0028 東京都中央区八重洲 2-6-20 ホンダ八重洲ビル
TEL: 03-3274-5125 FAX: 03-3274-5103 <http://www.hondafoundation.jp>